

ICT教育の今

林向達◎徳島文理大学短期大学部准教授
りんこうたつ◎1971年生まれ。

ICTって便利？

私は自分のスマートフォンを授業記録の道具として使っています。大学の授業ではありませんが、板書をカメラ機能で撮影しておくのです。そうしておくのと、どこまで授業したのか、前時の学習内容を振り返ることができるので大変便利です。

1年を通して板書写真がたまると、自分の授業の見直し材料にも使えますし、同じような板書内容が繰り返されるときはプリント化することを確認します。

学生たちにグループ活動してもらうときには、貼り付けられる付箋紙を活用しますが、その成果もカメラで撮影して残します。最近、とても便利なアプリが登場しました。たくさん付箋をまとめて一度撮影するだけで一つ一つの付箋をきれいにデジタル化してくれるアプリです。後日、印刷物として配布することも容易になりました。

かようにICT機器は、授業や学習活動を裏側からサポートするときに便利です。

小中学校で導入が進みつつある指導者用デジタル教科書も授業をサポートしてくれる道具の一つです。もちろんそのためのテレビや液晶プロジェクターといった大画面提示装置や教室備え付けのパソコンも整備が必要な道具です。

こうした整備を含む学校のICT対応が求められています。本来であれば、自分の手持ちの機器を使うのではなく、学校の備品としてデジタルカメ

ラ等が用意され、先生たちの授業研究や準備で自由に使えるように整えておくことがICTの便利さを生かす最初のステップになるはず。

子どもたちとICTの関係

先生たちにとって便利であるなら、子どもたちにも同様に便利ではないのか。たとえば、調べ学習でインターネットの検索が役立つかも知れませんが、植物の観察記録にデジタルカメラが使えることです。グループ発表に使うスライドの作成にパソコンが活躍します。説明では理解の難しい事柄は動画を視聴することで一目瞭然かも知れません。

ICT機器がよき学習の道具になってくれば、子どもたちの学習活動を活性化してくれると考えることは不自然なことではありません。

しかし、事はそう簡単ではありません。実のところ、ICTの便利さが子どもたちの学習機会を奪ってしまう可能性を私たちは予感していません。どうか。テキストな検索語を入力して最初にでてきた情報を鵜呑みにしてしまう子、関係のない対象物を後で消せるとばかりにふざけて撮影していたら植物の成長変化に気づけなかった子、スライド作成操作は得意な子が独占してしまつて作業中はずっと眺めているしかなかった子、動画を見ている間は分かった気になつても後に自分の言葉で説明することができずにいる子…。

子どもたちがICTを活用することで学習が促進することを期待したのに、どこかで子どもたち

の学習を阻害しているとすれば、ICT教育懷疑論が出てきても不思議ではありません。おそらく、私たちはこうした現象を見極めて学習に役立つICT活用をつかまえていく長い道のりを歩き出したばかりなのだと思えます。

新しい教育とICT

「ICT活用」は、単独で語ることができません。かならず「教育学習におけるICT活用」として考えなければなりません。つまり、目的目標があつて初めて手段としてのICT活用が選択肢として吟味されるのです。

そのため「ICT教育」といった話題には、何かしら新しい教育の必要性がセットで唱えられているものです。国は「協働教育」という言葉で新しい時代の教育・学習の必要性を強調しています。知識伝達型であつた学校の授業を知識構築型に転換することが情報基盤社会において必要なのだといった論調です。世界的にも「21世紀型スキル」といった能力育成にICT活用が不可欠であるとの議論があります。他には「反転授業」や「英語教育」の文脈でもICT活用が言及されています。こうした新しい教育を引き受けるための素地が学校に用意できているかどうかが問題ですが、困ったことにここで奇妙な勘違いが起ります。先にICT環境を整えることが新しい教育の素

地づくりであると逆転した発想が先行してしまう例が少なくないのです。

ICTは高コスト？

一部の先進的な地方自治体では、児童生徒1人1台の学習情報端末を用意し、教室に電子黒板や無線LANを設置して、インターネットから教材や情報を入力するシステムを構築しています。

ところが、授業中に児童生徒がネットワークへ一斉にアクセスしたら不具合が生じたというニュースも伝わっていました。

日頃利用しているインターネットのサービスが普段から数十万、数百万のユーザーを相手にしていることを見聞きしていると、学校はどれだけ貧弱なシステムを導入したのかとがった見方をしてみまいがちですが、実は私たちが日常利用しているインターネットさえも集中する通信をどう分散させ安定させるのかということに苦心し、膨大なコストとエネルギーを注いでいます。だとすると、市場規模の小さい教育の学校一つ一つにそれだけコストのかかるシステムを設置することが現実的かどうか、真剣に考えなければなりません。まして、新しい教育でどんなICT活用をしたらよいのか学校の先生方が熟知する前から、設備環境が整えられてしまうと、コストに見合う教育学習成果という呪縛に縛られ、小さな取り組みと

成果の積み重ねという教育学習の営みが阻害されてしまう問題さえ起こり得るのです。

フリーハンドを増やす試み

数年前、研究者仲間と『デジタル社会の学びのかたち』（北大路書房）という本を翻訳しました。教育とテクノロジーの関係について、推進派と懐疑派の双方の意見や歴史的な見地も含めて議論しています。なぜ学校や先生方がテクノロジーに懐疑的であるのか、それでもテクノロジーに関する様々な要因が長い時間をかけて学校教育を変えていくだろう事を予見する内容です。

私自身も学校教育は変わるべきだろうと考えています。しかし、それは何かしら新しい教育を大々的に取り入れる形ではないかと思つています。先生方一人ひとりが子どもたちの学びを見据えて「こうしたらどうか」「あのアイデアを取り入れよう」「こんな変化を見せたい」等の試みを実践できることが必要で、それを助ける有用な道具の一つがICT機器であると考えています。ICT教育は、大きな話で語られやすく、また、具体的な道具の利便性に振り回される危険も残っています。しかし今必要なのは、新しい試みに挑戦するフリーハンドを増やす努力であり、それを阻害する古い習慣やルール、固定観念の見直しです。ICTの問題はその契機でもあるのです。